

戦間期日本の女性を施主とする住宅に関する研究

—住まいの近代化と憧れを中心に—

主査 田中 厚子^{*1}

委員 松下 希和^{*2}, 赤澤 真理^{*3}

日本の住宅の近代化における女性の役割に関する研究の一端として、戦間期に女性が施主となった住宅6件を対象に、婦人雑誌というメディアを通じた近代化への貢献および憧れの醸成について分析した。住まいの外観は、海外渡航の有無によって和風と国際様式に二分し、起居様式は床座、椅子座、混合に三分した。それらの平面計画は一例を除き伝統的な座敷などの家父長制の名残はなく、自立した女性としての要望を満たしていた。室内には布地と色彩へのこだわりがあった。憧れには施主の交友関係における住まいへの憧れと、一般読者の憧れの二重構造があり、婦人雑誌の記事では、本人が住まいの写真に写ることで憧れを呼び、共同の意識を生み出した。

キーワード：1) 住宅，2) 女性，3) 施主，4) 婦人雑誌，5) 近代化，
6) 洋風，7) 和風，8) メディア，9) 吉屋信子，10) 水の江瀧子

A STUDY ON HOUSES BY WOMEN CLIENTS IN THE INTERWAR JAPAN

-On the modernization and yearning for the houses-

Ch. Atsuko Tanaka

Mem. Kiwa Matsushita, Mari Akazawa

This paper studies the modernization of houses and people's yearning for them through the analysis of six houses by women clients and the way they were presented in the women's magazines in the interwar Japan. The houses could be categorized as Japanese or International Modernist or mixed style, but they mostly eliminated the feudalistic aspects of the traditional houses and reflected the clients' lifestyle as independent women. Some houses were presented with the images of clients, and provided actual spaces for their female circle, which nurtured a sense of community among them.

1. 研究の目的・研究方法・既往研究

1.1 研究の目的と背景

本研究は日本の住宅の近代化における女性の役割や影響を探るために、戦間期（1919～1941）に女性が施主となった住宅に焦点をあて、その特徴と影響、特に住まいへの憧れとの関連を明らかにすることを目的とする。

中世・近世の日本住宅は、厳格な身分秩序で構成されており、女性は奥向きを基本的な居所とし、表向き空間に姿を現すことは少なかった。明治期以降、日本の住宅は伝統的な家父長制度に基づいた男性中心の平面から、ヒエラルキーのない居間中心の平面に変化した。新憲法による男女平等が実現した戦後復興期は、その過程において最も急激な変化を遂げた時期だが、そのような民主的な平面を持つ住宅の萌芽は、すでに大正期から昭和初期の戦間期に建てられた近代住宅にみられる。ヨーロッパの近代建築運動の影響を受けたこの戦間期の日本の住宅にお

いて、女性は住宅を建てる立場としてどのように寄与したのだろうか。女性が建築教育を受けられなかった当時、住宅の設計者となることは稀であった。では女性が施主として住宅を建てる場合は、どのような特徴がみられるのだろうか。

戦間期は、西欧の住まいをモデルとして、文化住宅をはじめとする家族本位の平面がとりいれられた時期である。経済的・社会的な力を得た一部の女性たちにとって、住宅は自分たちの住まい方、生き方を反映し、表現する媒体となった。先進的思考を持った自立した職業婦人である彼女たちが理想とした近代住宅は、国家が意図した「主婦の鑑」によってもたらされる家族本位の住宅、家事の効率化や居間中心のプランニングなどの関心は共有しつつも、時に異なる方向性をもっていた。それは彼女たちの住宅が家長から管理を任され、将来の国民を育成することを目的とした家庭の器ではなく、主体的な個としてのラ

^{*1} 芝浦工業大学建築学部特任教授 博士（工学） ^{*2} 芝浦工業大学システム理工学部教授 博士（工学） ^{*3} 大妻女子大学家政学部講師 博士（工学）

ライフスタイルを実践するものであったからである。女性を施主とする家は多くの場合、上記の点で一般の住宅と異なる先進的な事例であったが、住宅が女性領域とされたがゆえに、建築の専門誌などにとどまらず、新聞や婦人雑誌などでも紹介された。それらは読者の住まいへの憧れにどのようにつながり、さらに、その憧れは男女平等が実現し、女性の主体性が認められ始めた戦後の住宅のあり方にどのような影響を与えたのだろうか。

これまで、社会学の分野では近代国家が家族という単位を再定義し、それを女性の領域としたことで住まい手としての女性が生活改善運動にも能動的に寄与したことが明らかになっている^{文1)}。女性は、住まい手として住生活の向上に寄与してきた。しかし戦間期において社会で規定された家庭像ではなく、個としての女性のライフスタイルを反映した住宅やその成り立ちを考えたとき、「住生活の向上」は、別の意味をもつのではないだろうか。

以上のように、女性を施主とする住宅についての言説や平面計画を考察することで、住宅の近代化と女性の関係性を検証し、それによって女性が生活や住宅の近代化をただ享受したのではなく、能動的に推し進め、形成したことを明らかにしたい。

1-2 研究方法と既往研究

施主としての女性たちが近代住宅の推進にどのような役割を果たしたかを明らかにするために、その言説や図像、平面計画などの分析とともに、同時代の国際的な影響および日本の伝統的な住宅の継承を分析する。

1) 研究対象となる住宅の抽出：昭和初期に活躍していた建築家の業績一覧や建築・住宅雑誌から戦間期に著名な女性が施主となった事例を抽出する。

2) 現地調査と図面資料による設計の分析：研究対象住宅が現存もしくは移築保存されている場合は現地調査を行う。現存しない場合は、図面、写真、設計者の言説から住宅の平面、機能性、装飾などを調査し、言説に表れる施主の意図がどのように実現されているのかを分析する。

3) 言説・図像にみられる施主の意図の抽出：図面や出版物のほか、手紙・日記・アルバムなど私的な資料に記された設計者とのやりとりや、計画の経過から、設計者の意図や住宅に求めた空間を分析する。また施主が主体的な個としての自我を持つに至った背景を探る。

4) メディアによる住宅の表現とその受容の分析：婦人雑誌に記載された住宅関連記事の概要を把握した上で、研究対象住宅が取り上げられた雑誌などの記事の写真や図版、言説を調査する^{注1)}。

5) 欧米のライフスタイルと近代住宅の影響の分析：施主となった女性の海外渡航の言説や図像などの資料から、関連する近代住宅の影響を調べ、その影響がどのように住宅に反映されたかを分析する。

6) 日本の伝統的な住宅の要素の分析：住宅の平面計画

における和室の位置、その仕上げ、しつらえ、装飾などを検討し、女性の空間として歴史的な要素がどのように継承されたかを分析し、憧れの要素を抽出する。

戦間期の女性建築家、および婦人雑誌の記事と住まいの近代化に関する研究はすでになされているが^{注2)}、女性を施主とする住宅に関する研究はされていない。

2. 女性が施主となる住宅

2-1. 施主となる女性

明治期から第二次世界大戦までに女性が施主となり、経済的、意思的に主導的立場で自邸を建てられたのは、女優、文筆家などの職業人あるいは裕福な未亡人に限られていた。前者としては、本稿で取り上げた川上貞奴、水の江瀧子、三宅やす子、吉屋信子、宇野千代、林芙美子以外に、美容師の山野愛子、画家の三岸節子、音楽家の井上園子などの例があり、後者としては、富山の廻船問屋の馬場はるの例があげられる。その他、妾宅として知られる住宅がある^{注3)}。本稿では、①女性が経済的・意思的に主導した、②女性の名前でメディアに掲載された、③住宅の資料が存在する、という3点を満たすものとして、「三宅やす子邸」、「宇野千代邸」、川上貞奴の「萬松園」「吉屋信子邸」、「水の江瀧子邸」、「林芙美子邸」を対象とする^{注4)}。以下に施主の概要を示す。

1) 川上貞奴 (1871-1946)：小山貞 (川上貞奴) は東京・日本橋に生まれ、7歳で葎町の置屋の養女となり芸妓として名を成す。23歳で俳優の川上音二郎と結婚し、一座とともにアメリカおよびヨーロッパで興行、「日本初の女優」となる。40歳で音二郎と死別した後、福沢桃介の中部地域での近代化事業を支えるために1920年に名古屋に「二葉館」を建てて住む。福沢の死後、1932年に木曽川沿い鶴沼の土地を買取り、菩提寺「貞照寺」と別邸「萬松園」を建設した。

2) 三宅やす子 (1890-1932)：京都に生まれ、女子高等師範学校付属高等女学校を卒業後、昆虫学者の三宅恒方と結婚。31歳で夫に先立たれ、子ども二人を育てながら文筆家、文化人として活躍した^{注5)}。小説・論評を新聞雑誌に著しただけでなく、個人誌「ウーマンカレント」を主宰し、婦人の立場向上のための啓蒙活動も行った。38歳で建設した自邸は、斬新なデザインだけでなく強盗にあったことでメディアに注目された。

3) 宇野千代 (1897-1996)：山口県出身。1921年に懸賞小説で一等に選ばれ作家になる。1929年に東郷青児 (1897-1978) と出会い、翌年34歳で淡島の家を建てた。1936年に北原武夫とともに雑誌『スタイル』を編集・発行する。1937年に千駄ヶ谷、1939年に小石川、1950年に木挽町 (佐藤武夫設計)、1956年に青山南町に居を構え、1967年から那須に別荘をもつなど生涯に11軒の家を建てた^{注6)}。住まいへの関心の高さは、雑誌『スタイル』

の内容にも現れている。

4) **吉屋信子** (1896-1973) : 新潟市に生まれ, 24 歳のときに懸賞小説で小説家デビュー以降, 新聞や婦人雑誌を中心に小説を発表, 一躍流行作家となった。独立した職業婦人として小説だけでなく, 対談や取材などにも頻繁に登場し, 特に昭和戦前期には女性の啓発者としても女性読者に絶大なる人気を誇った。断髪・洋装の「新しい女」の象徴であり, 女性の伴侶と生涯を共にした。生涯に別荘を含めて少なくとも 6 件の家を建設, その中の 3 件は吉田五十八が設計したが, 建築作品として最も重要な住宅は 1936 年に 40 歳で建てた砂土原の家である。

5) **水の江瀧子** (1915-2009) : 北海道小樽市に生まれ, 13 歳の時に東京松竹楽劇部 (のちの松竹歌劇団) オーディションに合格, 「男装の麗人」(愛称ターキー) としてトップスターになる。1937 年に 21 歳で牛込の自邸を建設した。1939 年に退団し渡米, 翌年帰国した。戦後はテレビ出演や, 日本初の女性映画プロデューサーとして活躍した。生涯に網戸武夫設計の 5 軒の家を建てたがメディアに発表したのは牛込の自邸だけである。

6) **林芙美子** (1903-1951) : 福岡県門司で生まれ, 行商を営む母と養父に伴われて, 幼少期から九州各地を転々とし, 19 歳で上京した後も生活のために様々な仕事をしながら, 文学の道を志した。25 歳で著した「放浪記」がベストセラーとなり, 1931 年 11 月に渡欧, 翌年 6 月に帰国する。戦中は従軍記者として大陸や南方に赴き, 1941 年, 37 歳で落合に現存する自邸を建てた。

このように施主の多くが生涯に何度も住宅を建てたという事実は, その時のライフスタイルを反映する器として住宅を捉えていたことを示している。

2-2 各住宅の概要：平面及び室内の構成と特徴

各住宅の基本データと概要を【表 2-1】にまとめる。

2-2-A. **三宅やす子邸**【図 2-1】以後三宅邸, 石本喜久治, 担当山口文象, 1928 : 家族構成は, 本人, 長女, 長男。敷地は角地で, 低い金属の柵に囲まれた平地に建つ^{注 7)}。木造二階建て, 外観は箱型の国際様式, 長く突き出した玄関ポーチが特徴的である。平面は女中室以外全て洋室で構成される。テラスに面した居間と食堂は, その間を暖炉が仕切る一室空間で, 隣接するベランダは室内化されている。廊下の北側に水回りと女中室を配する構成は, 従来の中廊下型住宅に近い。2 階には暖炉のある自身の寝室及び納戸を介して娘 (後の作家, 三宅艶子) の寝室がある。北側の息子の部屋とはバルコニーを共有する。

石本喜久治事務所の作品であるが, 実際の担当者は当時 26 歳の岡村蚊象 (山口文象) であり, 山口にとって, ほぼひとりで手がけた最初期の実作であった。自らが立ち上げた創宇社 (1923 年結成) の第 5 回展 (1927 年 12 月開催) で, 三宅邸計画案の模型と図面を「住宅」と題し自作として展示したことからも, 力を入れていた作品であ

ったことがわかる。設計についての山口の言説はないが, 洋行する数年前の作品であることから, 全て書物などから得た知識に基づいて設計されたと考えられる。丸い窓を水平垂直に割ったデ・スティル風のステンドグラスや, 家具, 照明器具などは, ほぼ前後して, 同じく山口が担当した白木屋の内装に相似している。特に白木屋の 5 階の特別応接室と三宅邸の食堂は, 幾何学的なステンドグラスの丸窓を背にした造り付けのソファ, 幾何学模様のカーペットなど類似点が多い。

2-2-B. **宇野千代・東郷青児邸**【図 2-2】宇野邸, 石本喜久治, 1931 : 家族構成は本人・東郷とその息子。白い箱型の国際様式の外観を持ち, 女中部屋以外全て洋室である。開閉する窓は押し出し式。ガラス面の上に浅い小庇がつく。前庭は広く, 白くペイントした金網の柵が巡る。北東の角にアトリエを配した平屋で, 玄関から直接居間に至る。アトリエ, 応接, サンプルーム, 寝室には, 居間を介して至る。居間の半円形の壁面の内側に黒い円卓が置かれる。宇野の書斎は寝室に付属し, 書斎からサンプルーム, さらに居間へと動線がつながる。住宅の中央にある居間と東側の応接室はカーテンで区切られる。天井の高いアトリエの西側に中二階があり, 急な梯子階段が用いられている。

居間の半円型の仕切り, アトリエの吹き抜けの一部に設けられた中二階など当時の近代建築の影響が顕著である。居間に動線を集めた平面は斬新で, 室内は白と黒で仕上げられ, 全て木製の家具や建具は黒ペイント, テラスのタイルはチョコレート色である。例外的に東側の細長い窓のステンドグラスに淡い色彩が使われた。宇野の著書によれば, 工事費の遅れに「腹を立てた設計士」が寝室と居間に建具を入れただけで, 他は吹きさらしのままにしたとされ^{文 3)}, 設計者の言説は残されていない。

2-2-C **萬松園**【図 2-3】設計者不明, 1933 : 木曾川沿いの敷地に建つ別荘で, 北西に表門, 北東に独立した茶室がある^{文 4)}。主屋は, 鋳鉄製の瓦葺きの入母屋屋根を中心に, 寄棟屋根や切妻屋根, 茅葺き屋根をもつ 6 棟から成る。基本的に数寄屋造だが, 田舎屋のみ民家風。主屋は, 玄関・広間棟を中心に 6 棟がコの字型に雁行配置される。玄関・広間棟は, 式台を備えた玄関の北側に執事室と内玄関, 南側に縁座敷, 広間, 居間, 茶の間, 書斎があり, 北側に続く仏間・客間棟には, 仏間, サンプルーム, 客間, さらに浴室棟, 茶室棟, 田舎家棟に至る。玄関の北の台所棟には, 執事室内玄関及び食堂・厨房・女中部屋が並ぶ。

贅を尽くした和風建築であり, 各部屋に源氏物語に因む装飾がある^{注 8)}。接客空間である広間と居間は書院造を基本とし, 畳床壁面の打雲紙貼り, 蟻壁の金砂子雲紋の意匠とともに 襖の水墨画^{注 9)}, 付書院の欄間, 杉戸に描かれた賢人など, 格式のある意匠もみられる。

水屋のある茶の間は, 天袋に花鳥と源氏香の図様の和紙貼りがあ

表 2-1 対象住宅の基本データ

	施主	住宅名	竣工	設計者	場所(現存有無)	規模	構造形式	生活様式	外観
A	三宅やす子	三宅邸	1928	石本喜久治、片岡安	世田谷砧村 (無)	1F/99.29, 2F/83.34 延床 182.63 平米	木造 2 階建	洋	国際様式
B	宇野千代	宇野邸	1931	石本喜久治	世田谷淡島 (無)	概算延床 204.25 平米	木造平屋、アトリエに中二階	洋	国際様式
C	川上貞奴	萬松園	1933	不明	岐阜県各務原市鶴沼宝積寺町 (現存)	主屋 1F/480.80 平米、 2F/24.24 平米、	主屋：木造平屋 (一部 2 階建) 入母屋造・寄棟造・切妻造	和 (サンルーム洋)	和風
D	吉屋信子	吉屋邸	1936	吉田五十八	新宿区砂土原町 (無)	概算延床 256 平米	木造 2 階建	和・洋	近代和風
E	水の江瀧子	水の江邸	1937	網戸武夫、協力岡本博信	牛込喜久井町 (無)	1F/42.83 坪、 2F/35.11、RF/1.26、 延床 72.20	木造 2 階建、陸屋根、外壁モルタルガンタイト仕上げ	和・洋	国際様式
F	林芙美子	林邸	1941	山口文象	新宿区落合 (現存)	概算延床 196.31 平米	木造平家	和	和風

どがある。書斎は氷列紋様の竹の地下窓、透かし窓など中国風の意匠に加え、花鳥柄の金唐草紙や布貼りの小襖などがある。仏間には黒漆塗で螺細の輪宝や牡丹唐草・雲の彫刻が施された仏壇があり、襖には黒地に金で菩提樹、天井に色鮮やかな飛天・迦陵頻伽が描かれる。唯一の洋室であるサンルームは、タイル貼りの床に、菱子状ステンドグラスの木製開き戸と欄間が全面に並び、軒は半透明ガラスというように近代的である。茅葺の田舎家は、当初は接客用に玄関脇にあったが、民家風の意匠を生かして現在の位置に移築された^{文6)}。サンルームと田舎家のみ椅子座、他はすべて和室である。

2-2-D. 吉屋信子邸 【図 2-4】吉屋邸、吉田五十八、1936：家族構成は本人、門馬千代、母の 3 人。新興数寄屋と呼ばれる和風の外観で道路側の塀と統一されたデザインになっている。1 階は基本的に中廊下型であり、編集者が待ったための応接室が 2 部屋と、プライベートな 2 階には書斎と寝室が配置されている。当時吉田が目指した「畳のない数寄屋」を実現し、イス座の部屋がほとんどであるが、吉屋の希望で居間などは床座になった。居間は女流文学者会など、吉屋の女友達が語らうサロンとしても用いられた。庭は日本庭園ではあまり用いない孟竹林を設けた。

吉田はこの住宅の平面計画で部屋同士が互いに関係し合う「室群」という新しい考え方をういた^{文7)}。生活に関係のある室群（八畳の茶の間、次の間、ベランダ）と職業（著述）に関係のある室群（書斎、書庫、寝室）が、その時折の部屋の使用者の状況によって、用途や関係が変化していくような設計になっている。その他の意匠でも吉田が当時やりたいことは全部やった^{文8)}、と発言しているように、吉屋邸の設計には、後年伊藤ていじが分類した近代数寄屋の六種類の手法のほとんどが含まれている^{文9)}。

2-2-E. 水の江瀧子邸 【図 2-5】水の江邸、網戸武夫、1937：家族は本人と姉夫婦。85 坪の長方形の敷地に、白い箱型の近代建築が建つ。中庭を挟んでコの字型の平面の南棟は水の江、北側は姉夫婦のエリアで、階段・女中室などを従えた廊下がつなぐ。南棟 1 階のホールは洋間だが 2 階の寝室は洋室と和室が隣接する。北棟の居室は和室である。ホールは取材やファンとの集いに使われる公的な場

で、オーニングがついたテラスに面する。中庭は和風庭園である。

設計者の網戸武夫は、「モダンな新しい感覚でターキーのキャラクターを出す」ことを意図した。さらに無機的な国際様式とは一線を画すよう「照明器具、壁の仕上げ、カーテン、家具、調度品、絨毯にいたるまで全てを、一切合財総合的に設計した^{注10)}」。ファンの応接や踊りの練習のための 1 階のホール（社交室）は壁全体にグレー地に淡い色の水玉模様のウールの洋服生地貼りとし、さらに東南の角に「コアン・ダムール」と名付けたソファのスペースを設け、人形棚は白いビロード貼り、プリズムガラスを嵌めるなどスターの住まいらしい華やきがみられるが、私的空間としての和室は落ち着いた意匠である。

2-2-F. 林芙美子邸 【図 2-6】林邸、山口文象、1941：家族構成は本人、夫、養子、母。和風の木造平家。設計当時は一棟の計画であったが、一棟の床面積が 30.25 坪以下という当時の建築規模の制限により、林と夫（手塚緑敏）の名義で一棟ずつ建てる構成になった。東棟は、南の庭に面して茶の間と縁側、さらに小間が庭に突き出し、客間や二段ベッドの女中室、浴室、厨房は北側。西棟に手塚のアトリエと寝室と書斎がある。東棟は生活の場であるとともに公的な場、西棟は仕事と就寝というように公私の空間の区別は曖昧である。

3 章で述べるように、この住宅は林の主導で設計された。林は山口に依頼する前に 100 枚近くのスケッチを自ら描いたと記している^{文11)}。山口はほぼ同時期に民家風の外観の自邸を建設しているが、施主の意向の強いこの和風住宅はモダニスト建築家としての力を発揮できる仕事ではなかった。山口はこの家について言及しておらず、作品として発表しなかった。

以上 6 件の事例は【図 2-7】のように和風と洋風（モダニズム）の外観を持ち、平面の構成は洋室（椅子座）だけのものと和室（床座）だけのもの、両者を備えたものの 3 種類であった。服装と生活様式については、和装で椅子座、洋装で床座というように必ずしも一致するとは限らず、吉屋邸のように室群という考え方をを用いる例もあった。室内の仕上げは、宇野邸のみモノクロームだが、全体に布

地を多用し、明るい色彩を用いる傾向があり、それは特に水の江邸で顕著だった。

3. 憧れの醸成

本研究の対象の施主は著名人であるがゆえに、その住まいは一般に憧れを持って受け止められたが、同時にそれは施主自身の住まいの憧れも反映した。後者を①施主の交友関係、②施主の欧米のライフスタイルや日本家屋に対する言説から読み解き、その結果、完成した住宅が主に雑誌メディアでどのように発信されたのかを4章で分析する。

3-1 施主と設計者の交友関係と住まいへの憧れ

本研究の対象である6名の女性の施主とそれを取り巻く人々の交友関係のキーワードとして「洋行」と「芸術家」が挙げられる。6名の施主は2名が俳優、4名が作家であるが、川上を除く5名は建築家、そして画家などの芸術家の間で横断的な交流があり、それが自邸建設に繋がったことがわかる【図3-1】。また6名のうち、自邸を建てる前に洋行したのは、川上貞奴、吉屋信子、林芙美子の3名で、いずれも近代設備の整った和風住宅を建てた。

A 三宅邸：四谷や牛込など住まいを経て、当時新開地であった砧村に三宅が建てた住宅は雑誌に「工学博士 片岡安、工学士 石本喜久治」の名前で発表された。片岡石本建築事務所に設計を依頼した経緯は明らかでない。事務所は三宅邸の前年に竣工した東京朝日新聞社社屋で一躍注目を浴びたが、その作風は近代建築として挑戦的なものであった。そのような建築家に住宅を依頼した三宅は、保守的な考えの持ち主でなかったと考えられる。三宅は生活に関して多くの論考を残しているが、住宅に関する記述は少ない。ただ、生活の簡素化については度々言及があり、本人は和装であることが多かったにも関わらず、洋装と椅子座を推奨していた。娘の艶子の随筆に「私が無理にせがんで建てて貰った郊外の家^{文12}」とあり、艶子の意向が強く反映した可能性がある。

B 宇野邸：宇野千代が東郷青児と暮らす家を建設しようとした1930年頃、三宅やす子の娘の艶子が阿部金剛と結婚、東郷と阿部はパリにいた頃からの付き合いから、三宅邸を設計した石本喜久治に設計を依頼した^{文13}。宇野と東郷は、三宅邸の洋風のライフスタイルに憧れを覚えたと考えられる。宇野は自宅について「畳の敷いてあるのは女中部屋だけで、ぜんぶ板敷きの純洋館であった。レースのカーテンをかけた広いサンルームがあった。応接間には黒塗りの大きな円卓が置いてある。ガスの瞬間湯沸し器と言うものを見たのも、始めてであった。浴室の中に洋便器と一緒にとりつけてある。中二階つきのアトリエもあった。すべてのものが完備した理想的な、その頃としては人目に立つ家であった。しかし、その家はなかなか完成しなかった。金の支払いが思うに任せなかったから

である^{注11}」と記している。

D 吉屋邸：一方、吉屋信子も三宅や宇野と親しい関係にあり、彼女らの住まいを訪れていた。吉屋が1928年に最初に建てた家は、自分で図面を引いた洋風のいわゆる文化住宅であった。新しい女にふさわしい住居に見えたが、その後の1年間の欧州生活が吉屋の住宅観を変えた。「日本の洋館ずまいのものほしさ、国土の生活内容、食物、風俗習慣、温度、空気のはげしい違いで、もの真似のおかしさ、もの足りなさ」を感じ、「日本特有の数寄屋づくりの情緒と匂いをほどこした中に、近代的衛生設備をほどこしてある家^{文14}」を求めるようになる。そして竣工直後の小林古径邸を見て、その設計者である吉田五十八に設計を依頼した。

吉田によると吉屋は「珍しい位世話をやかせなかった、理解ある建築主^{注12}」とされるが、「畳のない数寄屋」を実現したかった吉田に、一部は畳を敷きたいと注文するなど^{文15}、設計に吉屋の意思が反映されていないわけではない。また、住まい手の生活感覚を非常に意識した^{文16}という吉田が女性同士の特殊な家庭に影響を受けなかったとは考え難い。吉屋の住宅は、住まいであるだけでなく、仕事場であり、女流作家達が集うサロンでもあり、1936年に設立された「女流文学者会」の会場として使われた。彼女たちは筆一本でこの瀟洒な住宅を建てた吉屋に対して羨望を抱いていたと考えられる。

F 林邸：林と吉屋は一時期同じ下落合に家があり、親しく交流があった。すでに人気作家として不動の地位を築いていた吉屋は林の憧れの存在であったと考えられる。その吉屋が洋行後、1936年に吉田五十八の設計で建設した数寄屋造りの自邸は、林に少なからず影響した。林は自邸を新築する前、1931年から10年間下落合の洋館（借家）に住んだ経験から、「つくづく西洋館は嫌だ^{文17}」と思い、京都の郊外にある百姓家を理想としていた。また、吉屋と同様に洋行を経験して一層、和風住宅への憧れが強まった。林は吉屋邸に頻繁に来訪していたが、自邸の設計中には夫、手塚緑敏に吉屋邸を見せるために訪れている^{文18}。手塚は林の中に吉屋邸のイメージが強くあったことを証言している^{文19}。ただ、設計者を吉屋に紹介してもらうことはせず、山口文象に設計を依頼する。林と山口は林の洋行前から知り合いであったとされるが^{文20}、いわゆるエリート階層ではない出自や芸術への関心など山口と林とは、共鳴する部分が多かったと考えられる。

林は「設計家の意見をきき、いいアイデアを教はる事が大方だ^{注13}」と書く一方、「家を建てるにしても、たゞ人まかせで建てて住むと云ふのは何となく味気ないものだ^{注14}」と述べ、自宅の設計・建設にも自ら積極的に関わった。「客間には金をかけない事と、茶の間と風呂と厠と臺所には十二分に金をかける事と云ふのが、私の考へであった^{注15}」と書いており、新宿区歴史博物館収蔵の林の蔵

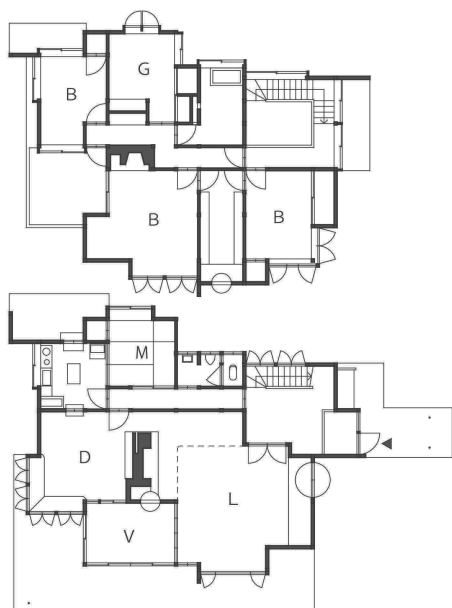


図2-1 三宅やす子邸（1928）

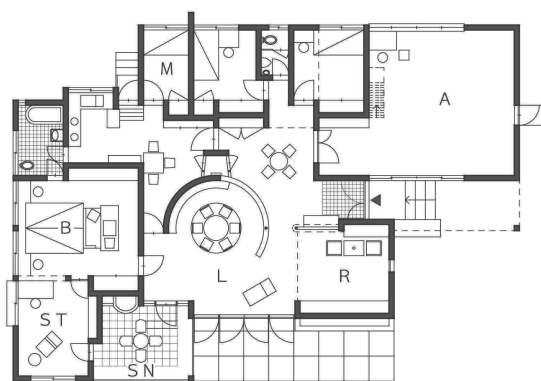


図2-2 宇野千代邸（1931） ㊦



縮尺 1:300

凡例

- A : アトリエ
- B : 寝室
- C : 茶の間
- D : 食堂
- DC : 人形コレクション室
- G : 客間
- H : ホール
- L : 居間
- M : 女中室
- O : 事務室
- R : 応接室
- SN : サンプルーム
- ST : 書斎
- TR : 茶室
- V : ベランダ

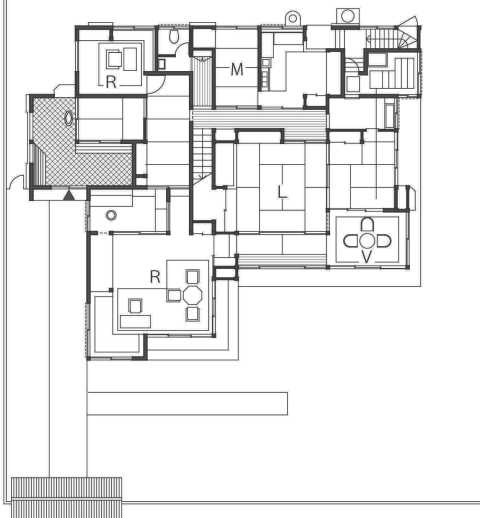
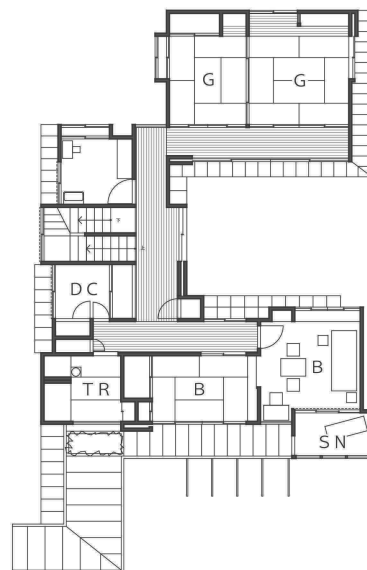


図2-4 吉屋信子邸（1936） ㊦

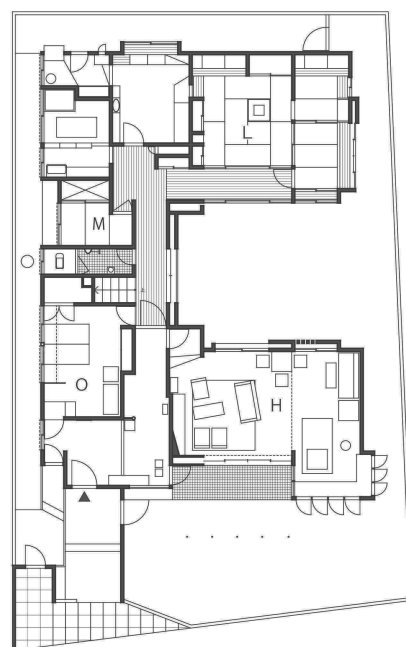


図2-5 水の江瀧子邸（1934） ㊦

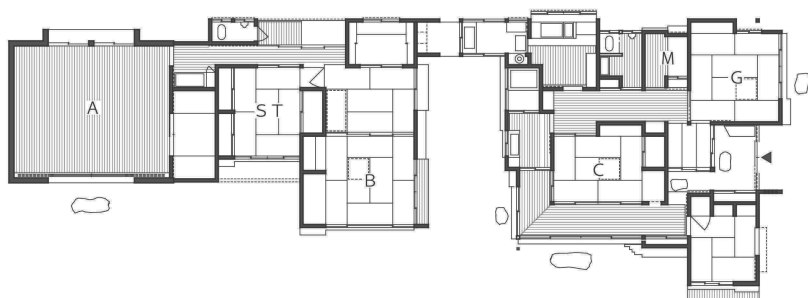


図2-6 林芙美子邸（1941） ㊦

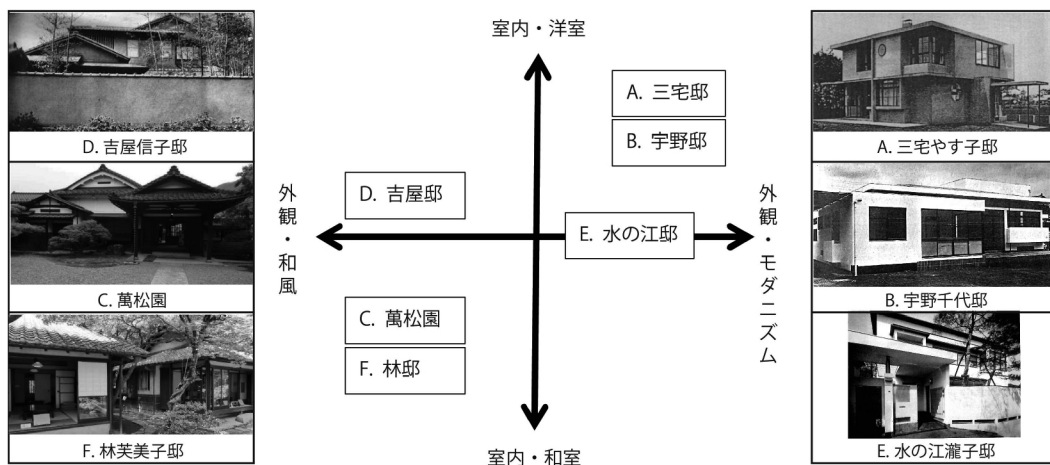
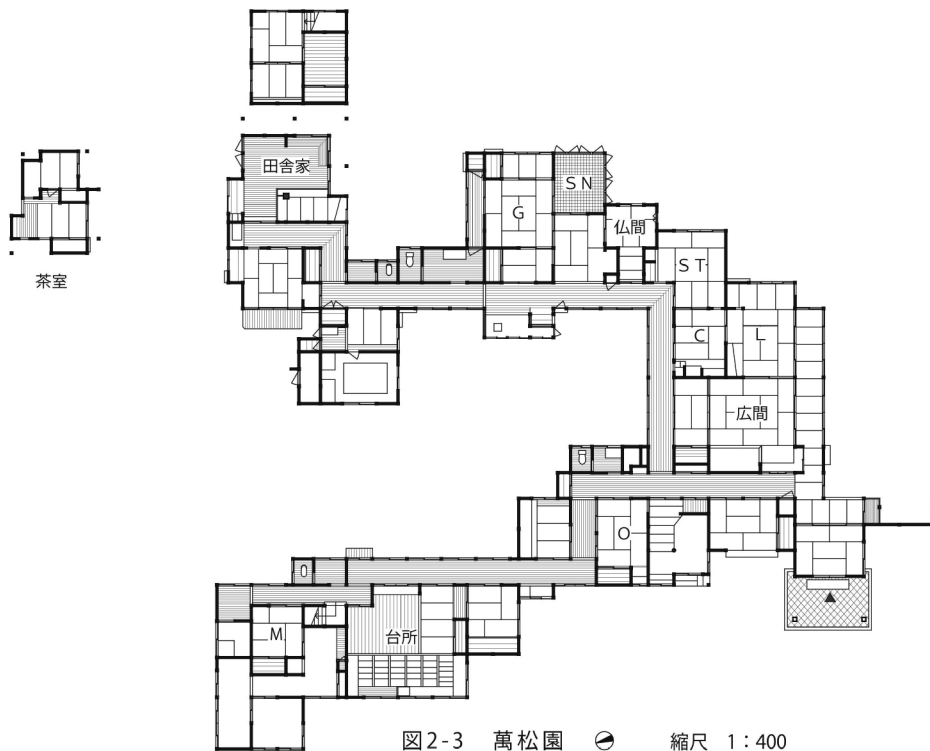


図2-7 和洋の外観と室内の座標図

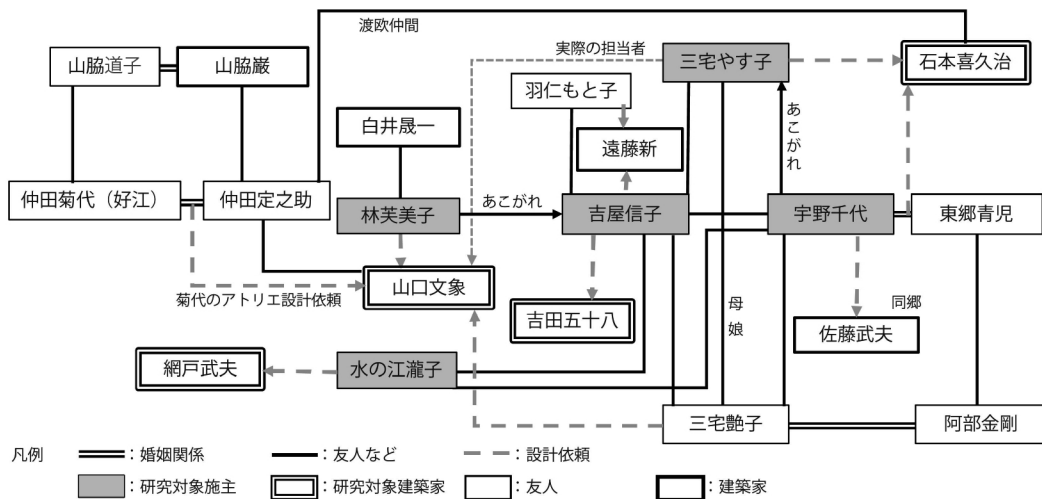


図3-1 建築家と施主などの交流関係

書の中には複数の住宅関連書が残っている^{注16}。上記の記述と蔵書から、林はかなり具体的な住宅のイメージを自分の中に持っていたことがわかる。確認できた蔵書は基本的に写真集で、その中の気に入ったイメージには「戸袋竹縁参考」「注意 老人室参考」などのメモが書き込まれており、設計者や大工と共有したと考えられる。実際に、写真集にあるイメージとほぼ同様に作られた部分もある。また、生活に関する随筆から、林が住まいを「愉しく」するために、自ら考え工夫する姿勢が読み取れる^{注17}。

E 水の江邸：水の江は対象の施主の中でもっとも若い、圧倒的なスターとして吉屋や宇野と面識があった。設計者の網戸武夫（1908-1999）とは、両者が代官山の同潤会アパートに住んでいた頃に知り合い、後援会の雑誌の表紙デザインを担当した縁で設計を依頼した^{注18}。網戸は当時曾禰・中條建築事務所の所員であり、石本や山口との交流は散見されない。

以上のように、まず施主同士の憧れが存在し、それがメディアに掲載され、読者はメディアを通して憧れを醸成するという二重構造があった。

4. メディアとその受容

戦間期に住宅が取り上げられる主なメディアとして、建築専門誌と一般誌が挙げられる。建築専門誌に掲載された住宅は、その時代における先進性や独自性が評価されたことを意味するが、社会への伝播力は弱い。一方、より広く読まれる一般誌では話題性や啓蒙性が重視され、住宅の形態だけでなく、施主の住まい方も含めた物語が重要になる。本研究では一般誌の中でも特に婦人雑誌に着目する。理由は①婦人雑誌は女性の教育や購買力の向上とともに、明治後半から大正にかけて発展し^{注19}、住まいに対する発信力が高かったこと、②本研究対象の施主である女性はこれらの雑誌に取材される側でありながら、同時に読者でもあり、記事は彼女たちの住宅観にも少なからず作用したと考えられるからである。

4-1 初期の婦人雑誌にみる住宅関連記事

近代国家が「家族」という単位を再定義し、それを女性領域としたことにより、婦人雑誌が一般家庭の衣食住の近代化に大きな影響をもたらしたことはこれまで様々な分野で明らかになっている^{文21}。住環境について、婦人雑誌に建築家の考えが掲載された最初期の例は1901年であるが^{文22}、その後、1910年代から30年代の初頭にかけて、実際に住宅設計の実務に携わっていた建築家だけでなく、生活改善を目指した建築教育者によって、一般の女性たちを啓蒙する下地が作られた。

一般的に影響力が大きかったとされる 四大婦人誌『婦人画報』『婦人倶楽部』『婦人公論』『主婦の友』に『婦人之友』を加えた5誌の目次をもとに住宅に関する建築家の言説を収集したところ、1912年から1932年の間の寄

稿が多かったのは、佐藤功一、伊東忠太、塚本靖、佐野利器、大熊喜邦であった^{注20}文23。5名の建築家の共通の論点は、①西洋住宅の紹介・洋風化の推奨、②イス座式の推奨、③接客本位から家族本位の間取り、④衛生への配慮・機械式設備の導入、⑤防犯・防災、であり、国家の基礎である家庭に科学を導入することにより文明化するという国策に則ったものであったが、詳細にみると個々の意見が反映している。

①の洋風化に関して、それぞれの建築家たちが洋行から帰国直後の論考には、日本の伝統家屋を否定し、急進的に生活の洋風化を勧める論調が多いものの、次第に日本の風土にあった生活様式や素材の折衷的な使用を許容するようになる傾向が見られた。そのような伝統や気候風土を再認識する傾向は、研究対象住宅にもみられた。③の家族のための居間を住宅の中のもっとも日当たりが良く広い場所にするべきであるという主張は共通しているが、客間については、佐野のみが中流以下の住宅には特別な理由が無ければ不要と主張しており、戦間期においては未だ接客や格式が重要視されていたことがわかる。④や⑤の衛生・設備や防犯・防災などのより実用的な観点は、読者の関心も高かったと考えられる。高等教育を受けていない読者を対象とする前提の婦人雑誌であるにもかかわらず、かなり専門的な説明がなされているものも多いが、図入りで解説するなどわかりやすくする工夫がみられた^{注21}。このように、当時建築界の主流であった建築家が一般女性の意識改革を重視し、婦人雑誌というメディアを通して直接女性に働きかけることは次世代に引き継がれた。

4-2 戦間期後半の婦人雑誌にみる建築家の言説

1920年代半ばになるとより若い世代の建築家が、住宅改良の考えに基づいた実践的で経済的な提案を含む記事を婦人雑誌に寄稿するようになる。例えば、吉田五十八は1924-1925年に『婦人倶楽部』に5編の記事を掲載した。その中には設備に関するものも含まれ^{注22}、その多くは図入りで非常に具体的な内容である。当時吉田は1923年に東京美術学校を卒業し、自分の事務所を開設したばかりでまだ実作がなかったが、この5編の寄稿の提案には、すでに吉屋邸などに見られる彼の作品の特徴の一端が示されている。吉田が『婦人倶楽部』に寄稿した経緯は不明だが、無名の建築家にアイデアを披露する場を提供していたことは特筆すべきであろう。1930年代半ばには、吉田の他に対象事例の設計者である石本や山口も婦人雑誌を活用するようになる^{注23}。その他、今和次郎、川喜田煉七郎、堀口捨巳、土浦亀城、土浦信子、蔵田周忠、佐藤武夫、谷口吉郎なども登場している。彼らは前世代が唱えた生活改善の論点を前提としつつ、住宅の合理化を推し進め、設計者として自作や住宅案を発表した。それらはそれまでの一般的な啓蒙記事よりも先駆的、かつ具体的

な事例の紹介であり、その中に本研究の対象である特殊な住宅が含まれ、一般読者のあこがれを醸成する場が確立したと言える。

4-3 対象住宅とメディア

研究対象の6つの事例のうち萬松園と林邸の2件は竣工当時雑誌に発表されなかった。一方、建築専門誌と婦人雑誌の両方に記事が掲載されたのは、三宅邸、吉屋邸、水の江邸の3件である。【表4-1】前者がメディアに取り上げられなかった理由は、施主が積極的にそれを望まなかったと推測されるほか、林邸に関しては、設計者（山口文象）が作品として発表しなかったためである^{注24}。

4-3-1 建築専門誌

建築専門誌では、三宅やす子邸と水の江瀧子邸が3誌ずつに発表され、宇野千代邸も『新建築』で発表されている^{注25}。三宅邸が小住宅にもかかわらず、多くのページを割いて紹介されたことは、専門家の間で当時開設したばかりの片岡・石本事務所の設計に対する注目度がうかがわれる。「石本喜久治氏の作品と建築観^{文24}」には、三宅邸は橋本邸や白木屋などの建物と共に、「すっきりと洗練され」ており、「グロピウス、メンデルゾーン、ファールンカンフ、アウト、コルビュジエ、ステバン等の傑作に比して勝るとも劣る所なく、全く同等の位置におかれるもの」と評され、また個別には「意匠に現代フランス的な影響を認めますが、更にこれが理解されて、日本人的な洗練を経て居る」と讃えられている。水の江邸は多くの内観写真が掲載され、キャプションに詳細な色彩や素材の説明が書かれている。しかし、施主の特殊性や住まい方についての言及は少なく、『新建築』のみに施主の立場やそのために設けられたホールなどの室について説明があり、ホールで水の江がポーズをとっている写真が一枚掲載されている。また、同誌は和紙で作られた照明器具など、室内のしつらえにも細かく言及している。

吉屋邸を取り上げた『建築世界』は例外的に、住宅の図面と写真だけでなく、吉田による「吉屋さんの家」、吉屋による「わたくしの家のこと」という論考を掲載し、設計者と施主の新居に対する意図を説明している。これは吉屋が作家であり、著名人であったことから特別な扱いであったと考えられる。また専門誌の中でも住宅改良会出版の『住宅』は、住宅のみを対象としていたことから発表された吉屋邸も施主の住まい方について言及しているが、人物の写った写真は掲載されていない。

4-3-2 婦人雑誌

戦間期の一般誌には有名人の住まいが紹介されることが多く、施主の知名度が高いほど、住宅の注目度も高かった。三宅邸は1929年1月に「講談強盗」が押し入った事件があったことから広く報道された。また、事件後に三宅自身も体験についての手記を雑誌に寄稿している。一連の報道では事件現場であった三宅邸の外観写真が頻繁に

表4-1 建設当時に雑誌に掲載された住宅記事

	建築雑誌	婦人雑誌・一般誌
A 三宅邸	建築新潮 1928, 国際建築 1928.06, 新建築 1929.01	(窃盗事件関連のみ)
B 宇野邸	新建築 1931.09	
D 吉屋邸	住宅 1936.05, 建築世界 1936.06, 住宅 1936.09	婦人画報 1938.05, スタイル 1938.09, スタイル 1938.11, 婦人之友 1941.06
E 水の江邸	新建築 1937.03, 国際建築 1937.04, 建築世界 1937.04	主婦の友 1937.04, 婦人公論 1937.04, 婦人倶楽部 1937.05, スタイル 1938.11, 週刊朝日 1937.0620

掲載された。理由としてこの非常に近代的な外観に人々が好奇の目を向けたことが考えられるが、その眼差しは憧れとは異なる。

憧れの対象としては、施主の人気から水の江邸がもっとも多く婦人誌を含む一般誌に掲載された^{注26}。『婦人公論』の記事「ターキーの新居訪問」など、全ての雑誌で水の江自身が住宅で寛いだり、ポーズを取っている写真が掲載されている。『主婦の友』と『婦人公論』では、設計者の網戸が詳細な解説をしており、この住宅で施主・水の江の個性や趣味を忠実に反映しようとした設計意図と具体的な室内の仕上げが語られた。また「甘美な色調」「シンデレラの夢の宮殿」というような憧れを喚起する言葉が用いられた。ここで住宅が単なる実用的な住まいを超え、施主のイメージを体現するメディアとして設計されたことは特筆される。

一方、吉屋邸は『婦人画報』などに掲載されたが、単独の記事ではなく、例えば「新しい数寄屋造り」というタイトルで吉田の設計した住宅のひとつとして吉屋邸の応接間を紹介、という取り上げられ方をした。吉屋が写った写真はなく、『建築世界』や『住宅』と比較して住まい方への言及もない代わりに、色彩、素材、布地について詳細に説明がされており、より建築に注目した記事であるといえる^{注27}。

4-3-2a 雑誌『スタイル』

もうひとつの重要なメディアとして宇野千代の『スタイル』誌が挙げられる。この雑誌は、日本版『ヴォーグ』を目指して、1936年6月から1941年9月まで発行され、戦争で中断した後、1946年に再開した。宇野千代の個性によって集められた多彩な執筆者による随筆や記事が掲載されているが、本研究に関連する人物では、水の江瀧子、吉屋信子、林芙美子、仲田菊代、阿部艶子（三宅やす子の娘）が頻繁に登場する。また住まいについても写真グラビアを用いて紹介しており、連載「お住まい拝見」の第1回は吉屋邸（1938.09）、第2回は林芙美子邸（1938.10）、第3回は水の江邸（1938.11）である^{注28}。この連載は、1938年9月から1941年9月まで続き36人の著名人の住宅が紹介された。その他、今和次郎による装身具の変遷、山口蚊象（文象）による書斎、寝室、サンルーム、家具など、建築家も執筆した。さらに1940年11月には「時局型小住

宅設計」の連載が始まり土浦亀城、蔵田周忠、山口蚊象などが寄稿した。

このような実践的な住宅への提案と、「お住まい拝見」のような憧れを引き出すグラビアの混在が『スタイル』を含む婦人雑誌の特徴になっている。

5. 住生活の向上への貢献

5-1 和洋のライフスタイルと共同意識

戦間期において施主や設計者の近代住宅の知識は西欧からもたらされ、施主や設計者の多くは実際に渡欧、渡米した経験があるか、または欧米のライフスタイルを積極的に実践しようとする意志をもっていた。1930年前後の国際様式の幾何学的な形態は、新しいライフスタイルの象徴であった。しかし和から洋への変化は直線的に進んだ訳ではなく、婦人雑誌に掲載された読者と専門家の平面図の変遷において、読者に洋風化への憧れと躊躇があったこと、また団欒空間が和から洋へ、さらに和洋が混在したことが指摘されている^{文26)}。

2章でみたようにA三宅邸とB宇野邸は全て洋室であり、モダニズムの住宅である。三宅は海外渡航しておらず、日常的にも和装を通した。B宇野邸は前述したように海外の最新の情報を取り入れているが、宇野には戦前の渡欧歴はなく、新しいライフスタイルの実践は長続きしなかった。

一方、D吉屋邸とE水の江邸は、和洋の室が混在する。水の江の海外渡航はこの自邸の建設後であり、網戸武夫も海外渡航していない。一方、吉屋は1928-29年にパリを中心に欧米に滞在、吉田五十八は1925-26年に渡欧した。吉田がこの海外視察を契機として日本の伝統建築に関心を深めたことはよく知られている。

吉屋は封建的な家風の家に生まれ、それが彼女の小説に男権思想への反発や女性主義の特色を与えた。ゆえに家父長制に敏感であり、「和風住宅」がその体现であることに気づいていたからか、最初の家は洋風であり、吉田に設計を依頼したのも、和風でありながら封建的では無い空間に惹かれたためと考えられる^{文27)}。椅子座の応接室は基本的に編集者や普通の客が来訪した時に使われ、居間・次の間・サンルームの室群は、ひと繋ぎりの空間として広い。前述したように、普段吉屋らが過ごす場所としてだけでなく、吉屋の親しい友人、女性の作家仲間が集う場を想定していた。「私の家には旦那様が存在せず、私自身が一家の主なので、気がねなくのんびりと客間を占領できるせい^{注29)}」と吉屋が書いたように、多くの女流作家が集まる場になっていた。そこに女性たちが集う写真は、読者をも引き込む共同体の意識を誘発した。

5-2 和への憧れ

C萬松園とF林邸は、和風を主とする。1899-1901年に欧米を巡業し海外生活を体験した川上貞奴は、1920年からあめりか屋が設計した和洋折衷の二葉館で暮らし、洋

風の生活には慣れていた。しかし最晩年に建てた萬松園はサンルームと田舎家を除き、すべて和室である。前述したように接客空間はもちろん私的空間にも和風の伝統に基づく凝った意匠が施されており、特に源氏物語および一部に桂離宮に用いられた細部意匠がみられる。

日本の女性の住空間の変遷を概観すると、平安時代における貴族社会では、夫が妻方の住居で家族生活を営む招婿婚が中心であった。鎌倉時代に武家社会における家制度の確立とともに、嫁入婚が社会に浸透し、北の方が家政を支える奥向きが確立した^{文28)}。江戸時代になると、徳川將軍家の住まいである江戸城において、表・中奥・大奥の空間秩序が形成された。邸宅における公的・私的領域の中で、女性の空間は私的領域を支えるようになる。女性の住まいである本丸及び西丸御殿の大奥対面所は、源氏物語や栄花物語の平安物語絵の障壁画で演出された^{文29)}。徳川將軍家は平安王朝文化に憧れを持ち、自らを王朝の継承者であることを求めた。

近世における女性の空間には、東福門院対面所（現・修学院離宮中御茶屋）（1682）、金沢市成巽閣「謁見の間」（1863）、佐賀市古澤家住宅多久御姫様御殿（1872 移築）などがあるが、その欄間・障壁画・唐紙・棚・釘隠・引手などには近世女性の衣装や調度にもみられるような色鮮やかで細かな装飾が施されている。また女性の教養として求められた物語・和歌や吉祥のモチーフが示されている。萬松園はこうした前近代における女性を住まい手とする上層住宅の系譜に連なる別荘として、伝統的な高貴な和への憧れを体现している。

それに対してF林邸では、林が「家をつくるならば、京都の郊外にある元家村なんかの百姓家が好きだ^{文17)}」と述べているように民家への憧れがみられる。林は理想のイメージを共有するために、山口事務所の担当者、角取廣司と自ら選んできた渡邊大工とを連れて10日ほど京都郊外の民家を見て回った。また、この家で唯一椅子座式のアトリエの斜めの天井と壁にひと繋ぎりに大きく取られた窓の構成は、林が宇治へ見学に行った際に「平等院の寺の墓所を見て、太鼓張りの荒い棧の障子」が気に入ったことから、太い棧の太鼓貼りとなっている。以上、和への憧れの中にも、平安王朝以来の伝統的意匠、民家的な意匠、近代和風という3タイプがみられた。

5-3 設備と近代性への憧れ

4-2でみたように、戦間期の婦人雑誌には設備関連の記事も掲載されており、一般家庭には手が届かない給湯、暖房、水洗便所などの設備もまた憧れの対象となった。水の江邸の『主婦の友』の記事では、台所の給湯器など、「明るく、清潔と便利を主に工夫して、忙しいターキーの家庭生活の簡易化を図った」と書かれている。当時は中流以上の住宅のほとんどに女中室があり、対象住宅のすべて女中部屋があるのは当然であった^{文30)}。主に女中が家事

労働に携わるとしても、主婦の家事労働の軽減につながる近代的な設備は、住まいの近代化に必要だった。それは近代性が機能性の向上を意味したからである。

暖房と水回りについて、**A 三宅邸**は、1階の居間と2階の主寝室に暖炉があり、風呂は2階に設置された。**B 宇野邸**は、タイル張りの浴室に洋式水洗便器・洗面台・洋風バスタブが設置され、ガス瞬間湯沸かし器があり、台所に電気冷蔵庫、居間のカーブした壁面の外側に電話室というように最新の設備があった。**E 水の江邸**では、煙突のある暖炉の中に練炭ストーブを設置しそれを隠すためにステンレスのグリルをはめ込み、さらにガスの補助ストーブを付けた。**D 吉屋邸**ではラジエーターとパネルヒーティングを併用した。客間や予備室のような来客の時だけ使う部屋には、立ち上がりの早いラジエーターを用いているが、機器は見えないように、床の地袋に隠され、金物のルーバーの扉部分からヒーターの熱が出るように考えられていた。また火鉢を置いた畳の茶の間にはほんのりと暖かいパネルヒーティングを用いた。北向きであるが、大きな窓のある台所にはガスコンロや給湯設備の機器など最新設備が備えられ、壁と床の一部に白いタイルが貼られていた。

一方、**C 萬松園**では、和式水洗便器を備えるが厨房に給湯設備はない。意匠面での配慮として、電気照明のスイッチボックスは、各廊下の壁にまとめられ木製細工のレリーフがそれを隠し、和室のコンセントは、畳のヘリと壁の間の狭い板に取り付けるなど近代的な設備が目立たない工夫がなされた。さらに **F 林邸**では、水洗便所と台所には人造石研ぎ出しの流し台と国産の電気冷蔵庫を備えてはいるが、「東西南北風の吹き抜ける家と云ふのが私の家に対する最も重要な信念であった^{注30}」と林が記したように、日本の気候風土にあった暮らしを旨とした。宇野もまた、最新の近代的な設備を備えた自邸の風通しが悪かったことを記した。そのような気候風土の重視は、婦人雑誌における建築家の言説にもみられた。また1930年代後半から、住宅の設備がさほど強調されなくなるのは、戦時に向かう時代の反映とも考えられる。

おわりに

戦間期の女性を施主とする住まい6件は、その外観において和風とモダニズムが3件ずつで、その起居様式において、床座が2件、椅子座が2件、混在が2件であった。室内の特徴としては、仕上げ材としての布地の使用や色彩の豊かさがみられた。住まいへの憧れには、宇野千代が三宅やす子の近代的な自邸に憧れ、また林芙美子が吉屋信子の自邸に憧れたような「施主同士の憧れ」と、一般読者が著名人の住まいを通して追体験する憧れの二重構造があった。婦人雑誌に吉屋邸と水の江邸が多く掲載され、そこに本人が写ることで憧れが醸成された。

海外渡航体験は生活様式に大きく関わっており、体験のない3名が国際様式（モダニズム）の住宅を建てたのに対し、体験のある3人は和風の住まいであった。和風の中にも近代的な和風、桂離宮に連なる貴族的な和風、民家的な素朴な和風があり、それぞれが憧れの対象となった。当時国際様式は洋風住宅と認識され、その斬新さはあまり注目されていない。また施主が家事労働とは縁がないにもかかわらず、住まいに近代的な設備が装備された。

萬松園を除く事例は、どれも従来の家父長制の座敷の名残を残さず、住まい手の生活空間が中心に置かれた。吉屋邸や水の江邸の応接室はサロンとして同業者やファンを受け入れる開かれた場であった。そのような暮らし方は、家制度に閉じ込められた一般女性、ことに主婦の憧れを醸成したと推察される。さらに、吉屋邸のサロンに集まる女流作家の写真、水の江邸のファンを応接する部屋、人形コレクションの部屋などは、女性の共同体としての意識を醸成したと考えられる。女性を施主とする住まいへの憧れは、そのライフスタイルや生き方への憧れでもあった。施主となった女性たちは、その住まいの近代性を通して、女性の主体的な住まいへの意識を示した。

<注>

- 1) 四大婦人雑誌(『主婦の友』、『婦人倶楽部』、『婦人公論』、『婦人画報』)及び『婦人之友』の5誌に『スタイル』を加えた6誌の創刊から1941年までの目次総覧を用いて、対象事例の建築家と施主に関連する記事を収集する。
- 2) 女性建築家に関する主な研究として、松川淳子他：日本における戦前戦後の草創期の女性建築家・技術者、住宅総合研究財団研究年報、No. 30, pp. 251-262, 住総研, 2003.3および個別の女性建築家の研究がある。婦人雑誌の記事と住まいに関する主な研究として〈文25〉など、家族制度と住まいに関する研究として西川祐子：近代国家と家族モデル、吉川弘文館、2000などがある。
- 3) 堀口捨己の紫烟荘(1926)、岡田邸(1933)、「若狭邸」(1939)、坂倉準三の飯箸邸(1941)など。
- 4) 同人物が建てた複数の住宅では、建築的な特性を考慮し総合的に判断した。研究の中段までは川上貞奴の二葉館(あめりか屋、1920年)を対象に含めたが、現存する復元建物から当時の生活を判断することが困難だったため対象外とした。
- 5) 例えば『婦人公論』は1925年に「人物評論」という当時話題の活動婦人をひとり取り上げ、様々な論者がその人について評する特集を組んだが、三宅はその第一号に取り上げられている。
- 6) 〈文2〉には、23歳で建てた大森馬込の藁葺き屋根の家や、10坪ほどの赤い屋根の洋館、コルビジェ淡島の家、渡り廊下のある和風の家、成金時代の家、那須のプレハブの家、那須の白い2階建の洋館など「奇妙な家ばかりであった」と書かれている。
- 7) 方位を示す資料がないため推察による。
- 8) 〈文5〉では、各室のそれぞれの意匠から源氏物語の巻名になぞらえた室名が用いられている。
- 9) 貞奴が南画を習った成木星州(1863-1936)筆の山水画。

- 10) 〈文 10〉 pp.81～89.「大衆のアイドルが、舞台の上で見せる不思議なファンタジーを、その住まいの中に程よく持ち込もう、ターキーの持っているスマートさ、「男装の麗人」ということばがふさわしい、あの時代の一ランク上をいくような女性としてのプロポーションのよさを、なんとか建築の上で表現したい」
 - 11) 〈文2〉pp.201-203.
 - 12) 〈文8〉p.63.
 - 13) 〈文 11〉p.67.
 - 14) 〈文 17〉p.121.
 - 15) 林芙美子:家をつくるにあたって,新宿歴史博物館所蔵資料
 - 16) 『建築写真類聚』第九期第十四集和風壁集,同第九期第十五集和洋前庭集,同第十期第六集住宅外装集,同第十期第八集趣味の数寄屋住宅,同第十期第十集茶室建築巻四,同第十期第十八集和風住宅の室内構成巻三,『建築写真類聚・別冊』数寄屋造の住宅東京牛込洪洋社,同建具写真集 巻二東京牛込洪洋社。
 - 17) 〈文 17〉p.122.
 - 18) 〈文 10〉pp.77-78.
 - 19) 〈文 26〉他
 - 20) 5名の建築家の住宅改良への関与は〈文 23〉に詳しい。
 - 21) 〈文 21〉『主婦之友』は小学校卒業程度の学力で理解できる基準があったとされ,対象婦人誌はすべて総ルビ表記だった。
 - 22) 「住宅向きの暖房として最も進歩したアルコラ暖房」婦人倶楽部 1924.12.
 - 23) 例えば,石本喜久治「洋風を採り入れた閑雅な中流住宅」『婦人公論』1935.05,山口蚊象「貴女の住む家はどうか改善されねばならぬか」『婦人公論』1937.11,「最小限住宅の一例」『婦人公論』1938.02, 鼎談・吉田五十八ほか「生活の中の日本的なものと西洋的なものをいかに生かすか」『婦人画報』1938.06.
 - 24) 〈文 19〉には「最近日本大学近江研究室によって発見され,竣工後四十年を経て初めて世に発表されることとなった」とある。
 - 25) 「東郷青児邸」として発表された。しかし東郷の絵を宇野が売り歩いて資金調達してことが記されている。〈文 13〉pp.75-78.
 - 26) 「白い,西洋館みたいな家で,牛込のターキー御殿なんてマスコミでも騒がれたんだけど,それは戦争がひどくなった時に手放した」と本人が語っている。〈文 25〉 p70
 - 27) 吉屋邸は東京朝日新聞,報知新聞と都新聞に掲載されたことが確認されているが,これらの記事は吉屋の住まい方への言及があるが,吉屋が写った写真は無い。
 - 28) 林芙美子邸は,本研究対象住宅の前に住んでいた洋館。連載には仲田菊代(3912),阿部艶子(1941)の住まいも含まれ,グラビアにはいずれも本人が写っている。
 - 29) 〈文 18〉
 - 30) 注 15) 前掲資料
- ＜参考文献＞
- 1) 小山静子:家庭の生成と女性の国民化, 勁草書房,1999
 - 2) 宇野千代:私のたてた家,暮らしの設計,中央公論社,1973.02
 - 3) 宇野千代:生きていく私,角川文庫, 2013
 - 4) 岐阜県近代和風建築総合調査報告書: 麓和善 [ほか] 著. 岐阜県教育委員会, 2016
 - 5) 旧川上家別邸萬松園,株式会社創寫館,2018
 - 6) 西和夫: 川上貞奴の菩提寺貞照寺と別荘萬松園-ひとりの女性先駆者の事績, 歴史と民俗, 神奈川大学日本常民文化研究所論集 23, 2007
 - 7) 吉田五十八:吉屋さんの家, 建築世界,1936.06, p.63
 - 8) 吉田五十八:数寄屋十話, 現代日本建築家全集3 吉田五十八,p.169
 - 9) 伊藤ていじ: 吉田五十八, 吉田五十八作品集, 新建築社, 1980, pp. 267-271.
 - 10) 網戸武夫: 建築・経験とモラル,住まい学体系/098 住まいの図書館出版局 1999,p82.
 - 11) 林芙美子:昔の家, 芸術新潮, 1950.01, p.67.
 - 12) 阿部艶子:母 三宅やす子,午前二時:私だけの時間,p.30
 - 13) 宇野千代:私の文学的回想記,中央公論社, 1972.pp75-76
 - 14) 吉屋信子:わたくしの家のこと, 建築世界, 1936.06
 - 15) 鼎談・吉田五十八ほか:生活の中の日本的なものと西洋的なものをいかに生かすか,婦人画報,1938.06, p.118.
 - 16) 磯崎新対談: 住宅の発見, 都市住宅 1971.01,p.18
 - 17) 林芙美子:美しい家,婦人の為の日記と随筆,愛育社,1946, p.123.
 - 18) 吉屋信子:純徳院芙蓉清美大姉 林芙美子と私,自伝的女流文壇史,講談社 2016
 - 19) RIA 建築総合研究所編:建築家山口文象 人と建築』相模書房 1982, p.232.
 - 20) 村松貞次郎「日本建築家山脈」鹿島出版会 p.219.
 - 21) 浜崎廣:女性誌の源流:出版ニュース社, 2004
 - 22) 曾根工学博士談:日本の家屋, 女学世界, 1901.04
 - 23) 松下希和:戦間期の婦人雑誌にみる建築家の住宅改良に関する言説とその特徴,日本建築学会学術講演梗概集,2021
 - 24) 岡田孝男:石本喜久治氏の作品と建築観, 新建築,1929.01, p.48-54.
 - 25) 水の江瀧子:ひまわり婆ちやま,婦人画報社,1988, p70
 - 26) 久保加津代:女性雑誌に住まいづくりを学ぶ-大正デモクラシー期を中心に, ドメス出版, 2002
 - 27) Kiwa Matsushita, “Reinventing a traditional Japanese Sukiya house to be non-patriarchal,” Society of Architectural Historians Virtual Conference 2020, April 30, 2020.
 - 28) 平井聖:日本住宅の歴史,NHK ブックス,1986. 赤澤真理:御簾の下からこぼれ出る装束,王朝物語絵と女性の空間,平凡社, 2019
 - 29) 小沢朝江:女性のための建築とその内部空間の演出に関する史的研究,科学研究費補助金研究成果報告書,2004. 千野香織 著作集,ブリュッケ, 2010
 - 30) 前掲由美子・田中厚子:女中部屋,女中がいた昭和,小泉和子編,河出書房新社,2012
- ・ 植田実:モボ・モガたちの家づくり, 東京人, 2000. 04
 - ・ 都市から郊外へ-一九三〇年代の東京, 世田谷文学館, 2012
 - ・ 伝統技法研究会編:旧川上貞奴邸復元工事報告書,名古屋市,2005
- ＜研究協力者＞
- 小笠原詠美 大妻女子大学 家政学部住文化研究室 4年生
笹川智美 笹川建築事務所